

連載

SPORTS

全球入魂レポート ⑭

取材・構成：岩本 勉
(野球解説者・スポーツコメンテーター)

違いを 理解することが 和の心である

東海大学体育学部教授

全日本柔道連盟理事

NPO法人柔道教育ソリダリティー理事長

山下泰裕

1984年、ロサンゼルスオリンピックの男子柔道・無差別級において金メダルを獲得した山下泰裕さんは、2回戦で軸足である右足に肉離れを起こしながらも、全力を尽くして戦い、準決勝・決勝まで全て1本勝ちを収めた。

通算成績は528勝16敗15分。203連勝で現役を引退した後は、世界に柔道を広める活動に精力的に取り組んでいる。山下さんがどのような思いで活動をされているのかをお聞きした。

柔道の国際化で
戦い方に変化が生じた

柔道は日本で生まれた、歴史のある競技ですが、その柔道の心得について、まずお教えください。

「柔道の創設者である嘉納治五郎かのうじごろう師範は、柔道を通して心身を磨き高め、社会に貢献できる人材を育てていくことが柔道の目的だと常に言ってきたわけです。ですから、柔道は人間教育だということをもちとものと伝えていきたいと思っています。」

なぜ「道」と言っているかですが、柔道には、「人生に生かされるから」道である。強いだけでは駄目なんだ。強いことは素晴らしいことだけど、もっと尊いことは、その強くなっていく過程で得たものを日常生活で生かしていくことである。そうすることによって、人生の成功者になりうる」という教えがあるのです。

この、柔道本来の目標を広く再認識していただくために、2001年から全日本柔道連盟と講道館の合同プロジェクトとして、柔道人のモラル向上と人づくりのための柔道の普及を目指した「柔道ルネッサンス」という活動を行っています。

近年は、勝つことばかり優先するという



Profile ● 山下泰裕(やました やすひろ)

1957年熊本県生まれ。1983年東海大学大学院体育学研究科修了。東海大学体育学部教授、東海大学柔道部部長、全日本柔道連盟理事、全日本柔道連盟強化副委員長。10歳から柔道を始め、通算成績559戦528勝16敗15分。1985年に引退後、アトランタ及びシドニー五輪日本代表監督、世界選手権監督などで後進育成に尽力する。1982年フランススポーツアカデミーグランプリ、1984年国民栄誉賞、1985年武道功労賞受賞、2007年紫綬褒章授賞。2003年～2007年国際柔道連盟教育コーチング理事。2006年NPO法人柔道教育ソリダリティーを設立、世界の柔道発展に努める。著書は『闘魂の柔道』(ベースボールマガジン社)、『武士道とともに生きる』(角川書店)など。

流れが世界的に出てきているので、この活動を世界にも発信したいと考えています」

——競技スポーツとしての要素が強まったからでしょうか。僕は柔道に関しては素人ですが、選手の格好が変わってきたことを感じていました。ボクシングのような、もしくは柔道着を着たレスリングのような構えをする選手が非常に多くなり、警告を受ける場面も増えたように思っています。

「柔道の魅力の1つに素晴らしい技がありますね。代表的なのは投技で、いわゆる一本勝ちです。ところが、勝ちたいがために相手に襟や袖を持たせない、またはリスクを背負わないために足を取りに行く、腰

を引く。そういった柔道が世界中で増えてきました。外国の友人が『このままでは柔道は駄目になるぞ』と言うほどです。もちろん全ての選手がそうというわけではありませんが、嘉納治五郎師範が目指した柔道を継承する一人として、非常に危機感ともどかしさを感じています」

世界最高の舞台で 取るべき姿を問う

——柔道人のモラル向上に関連してお伺いしたいのですが、世界大会で、海外のコーチが審判に向かって暴言を吐いたり悪態をつくという非常に残念な光景が見受けられました。

「そういうコーチが何人か出ているのは事実です。実は彼らは、私が選手時代や全日本の監督時代に互いに礼を尽くして戦った仲間なのです。

私は選手を指導して育てるのは素晴らしいことだと思っていますから、そのことに對して最大限の敬意を払っていますし、彼らもそれを知っています。だから、ブライベートな場でお茶などを飲みながら、『オリンピックや世界選手権で準決勝、決勝のコーチボックスに立つコーチというのは世

界で最高の指導者だよ』という話をしました。

『柔道つてももとは人間教育だと思わないか』と言うと、『そう思うよ』と答えてきます。そこで、『確かに審判が間違えることもあるし、現場の指導者には納得のいかない判定があるかもしれない。それに對して不満があるのは、俺も現場の監督をしていたから解る。でも、世界最高のコーチが審判に罵声を浴びせたり、畳の上にあがろうとしたり、あるいは不満があるからと椅子を蹴ったりして、柔道は教育的なスポーツとして認めてもらえるだろうか』という話をする、大体解ってくれませんか」

——その方は、山下さんが自分を理解してくれているということで、耳を傾けやすくなったのですか。でも、それですぐに解ってくれますか。試合になるとまた……ということはないのでしょうか。

「完全に理解したかとなると、課題は残っています。コーチはコーチボックスに座っていないけれども、あるコーチが試合中に熱くなって立ちあがってしまいました。でも、彼から見える場所に私がスッと動くと、チラッと私の顔を見てハッと我に返って座るといったことがあります」



Profile ● 岩本 勉(いわもと つとむ)

1971年大阪府生まれ。阪南大高から1990年にドラフト2位で日本ハムファイターズに入団。開幕投手を5度務め、エースとして活躍する一方、「ガンちゃん」の愛称で多くのファンに親しまれた。2005年引退。現在野球解説を中心に、文化放送「岩本勉のまいどスポーツ」、北海道放送「[[E]スポーツ」をはじめラジオ・テレビで活躍中。著書は「ガンちゃんの世界一おもしろいプロ野球の本」「ガンちゃんの日本一泣けるファイターズの本」「ガンちゃんの人に話したくなるプロ野球の面白ネタ本」(青春出版社)。本連載では、自身のモットーである「全球入魂」の意気込みで、スポーツに携わる人の生き方・考え方をアスリートならではの視点、感性を活かしてレポートする。

山下さんの思いに気づいてくれたわけですね。確かに真つ向勝負という面ではどうしても熱くなってしまうですし、世界に広がっていく中では、時代性も加わって、本来の柔道が目指した姿とは違った流れが出てくることはあると思います。ただ、現在指導をされている世代の方々は、柔道の心得をしっかり学んでいると思うのですが、その人たちの考え方も変わってきているのでしょうか。

いって頭の上で振り回したことを議題に出して、どう思うかを問いました。これは面白い会議になりましたよ。

まず出たのは、「サッカーでは喜びの表現在やるじゃないか。どうして他のスポーツはよくて柔道では駄目なんだ」という意見。2つ目は、「柔道は教育的なスポーツだが、われわれがやっているのは競技スポーツだ。生活をかけてギリギリの勝負をやっている人間と、一般の教育をする柔道を一緒に考えるのはおかしい。これは分けるべきだ」という意見。それから、「人気がある者のすることは、多少品が悪いオーバーアクションでも、マスコミは喜んで取り上げてくれるんだよ」という声も出ました。

このように最初は、そのポルトガルの選手に対して注意が出るのはおかしいという流れだったのです。

ところが次に反対派の声があがってきたのです。

山下さんが仕切ったのではなく、自然とそういう展開になったのですか。

「私は心の中で『お、いいぞ、いいぞ』とにつこりしてただけです。

まず、『柔道は柔道だ、サッカーじゃない。サッカーで許されているから柔道でもやっていいというのは話がおかしんじゃないか。相手に敬意を払う柔道でそういうことをやって許されるのか、許されないのかという点で考えなければならぬ。他のスポーツと一緒にしたら柔道は柔道でなくなる』という声が出ました。

その次に出たのは、「昨日の大会の会場にどれだけ子どもたちが来ていたと思うか? どれだけ現場の指導者がいたと思うか? あれが許されたら、次の週末の試合から子どもたちがどうするかはわかるだろう」という声です。さらに、「確かにわれわれがやっているのは生活のかかった競技スポーツだ。しかし、そのわれわれの行動が教育としての柔道にもすごく影響を与えていることを知る必要がある」という意見も出てきました。

それから、『マスコミが喜ぶからということとそれを認めるというのは絶対反対だ。マスコミが報道することがいつも正しいとは限らない。例えばサッカーの試合中にフリーガン同士がもめ始めたなら試合よりその紛争を追うだろう』という声もあがって、やはり相手に礼を尽くすという柔道にふさわしい行動が大事だと、前向きに話し合うことができました。

いろいろな考え方ができる中で、嘉納師範が提唱された「礼に始まり礼に終わる」というところにみなさんが賛同されたように感じます。

今、お話を伺っていて、去年のバ・リーグの最終戦の光景を思い出しました。

最後の最後までもつれた試合でしたが、その試合終了後に選手たちが、自分のチームのファンの方たちに挨拶をした後、相手チームのファンの方からのエールに応えていました。そこでバツと目の合った両チームの選手たちが歩み寄って互いの健闘を称えたのです。感動的なシーンでした。

そういう精神があり、また高校野球、大学野球までは試合前に整列し礼をして試合を開始していたのに、プロ野球ではショーアップの流れのまま試合が始まってしまいます。毎試合は無理だとしても、せめてシリーズの最初と最後はチーム同士、またファンの方にも礼をするということがあっても悪くないと個人的には思っています。

「いいことだと思えますよ。戦う相手は敵ではない。相手がいるから自分が磨き高められるんだ。試合中は熱くなっても、勝負が終わった瞬間にすっと冷静になって礼をする。相手に対して感謝の気持ち、あるいは尊敬の気持ちを持ち、それを示すということですからね。

私も何人か野球の監督を知っています。少年野球でも高校野球でも、それを通しての人間教育を大事にされています。野球にもそういう「道」がありますね」



「自分の基準では理解しにくいことは、新しい発見だ、また1つ勉強したと思うわけです」

主義主張は違っても お互いの立場は理解できる

——「柔道ルネッサンス」とは別に、山下さんはNPO法人柔道教育ソリダリティーを立ちあげて、柔道発展途上国への古くからの柔道着や畳のリサイクル支援、柔道文献の翻訳、柔道教材の無料配布をされたり、また、海外へ柔道の指導や講演に出向かれたり、外国人指導者や選手の受け入れといった活動をされていますね。

「国際柔道連盟には現在199の国や地域が加盟していますが、その多くの国は貧しいのです。そういう国を少しでも応援し

たいという気持ちがありました。また、世界をまわるうちに、日本人が持っている和の心や調和といったものをもっと世界に広げたい、そうすれば争いことも少なくなっていくのではないかと考えて、この活動を始めたのです。

自然を大事にして、全体の和というものを大事にする。それから人間として清く生きる、正直に生きる。最近はそのような言葉が死語になってきましたが、もともとそういうことを大事にする日本的な生き方が、もっと世界に広がってほしいと思っています。けれども現実には、日本は世界から見るとまだまだ遠い国で、日本に対する興味、関心、理解も決して高くはないのです。と



「なぜそうなのかを知りたいという前向きな好奇心を持っていると理解が進みやすいですね」



山下「違うところに価値があると思っているのです」
岩本「違いを認めていくと視野が広がりますね」

ところが柔道をやっている人は、柔道を通して日本に関心を持っていますから、まずはそこから始めようということなのです」

——山下さんは「世界平和」という言葉もよく口にされていますね。

「東海大学を創った松前重義博士が、私と同じ熊本出身で、ご自身もされていますが柔道が大好きでした。私の祖父と同一年で、私を孫のように可愛がってくれました。」

その松前先生によく言われたのが、「山下君、僕がなぜきを応援しているのか、解るか？ 試合に勝ってほしい、それもあ。しかしそれだけじゃないぞ。日本で生まれ育った柔道を通して、世界の若人との友好親善を深めてほしい。もっと言うスポーツを通して世界平和に貢献できる人間になってほしい。僕はそんな思いできを応援しているんだよ。解ってくれるか」ということでした。

松前先生が亡くなる前は、それを頭では解っていても身体では解っていませんでした。つまり、行動に結びついていなかったのです。それが少しずつずつ、頭から身体に入ってきました。

そして世界をまわって感じるのは、やはり世界はさまざまということ。人種も宗教も習慣も伝統も違います。そこで、自分をわかってもらおう、伝えようということは非常に大事だけでも、もっと大事なことは、お互いに相手を理解しようとするこ

とだと解ってきたのです。

主義主張は違ってもお互いの立場は理解できます。すると、何を考えているのか解らないとか、とんでもない国だというふうに自分のものさしでしか見ないということがなくなつて、なぜそう思うのか、なぜそういう言葉が出るのかが理解できるようになるのです。

スポーツというのは言葉が解らなくてもできますよね。すると、そこが異文化交流の場にもなつて、その中で徐々にお互いの違いを理解していくことができるでしょう。それはすなわち和の心だと私は思っているのです」

僕はずっと日本の野球をやっていたのですが、2003年にヒルマン監督がベ이스ボールを抱えてやってきて、「日本の野球はなぜこういうことをするんだ」とよく口にされました。それを聞いて選手たちは、「監督はどうして俺たちを否定するんだ」となり、チームにギクシャクした空気が生まれたのです。

それで僕はヒルマン監督のところへ行つて、時に声を荒らげましたが、丁寧に懇々と、ものすごく時間をかけて話し合ったのです。何を感じてくれたかはわかりません。でもその後監督は、選手との会話を増やしたり、日本の文化に興味を持って、

理解しようと変わっていかれました。

そうするうちに、それまではパワースタイル一点張りだったのに、送りバントをするようになったのです。その理由を尋ねると、「日本の選手は細かいプレーが得意だ。それをベースボールに入れると、自分がこれから築きあげていくスタイルが広がる」という答えが返ってきました。

選手たちもだんだん監督のやろうとしていることが解ってきましたし、監督のコメントに「リスペクト」という言葉がよく出るようになりました。

「素晴らしいお話ですね。岩本さんがヒルマン監督と話をされたのはすごく大きかったと思いますよ。目指しているものは同じなのに相手を理解できないと、とんでもないことを考えていると感じるけれど、お互いが違いを解って、それぞれのよさを生かすことができれば、間違いなく戦力も戦略も幅が広がりますよね」

本当の柔道家かどうかは これからの人生が決める

——ところで日本の柔道界にはその歴史を築いてこられた方々がおられます。一般に大先輩の世代には固定観念にとらわれてい



山下「今、若者や子どもたちに元気がないので、スポーツを通して何とか明るく元気にしたいと思うのです」

岩本「自分が育ててもらったように、野球教室で子供たちに声をかけ続けようと思います」

る姿が往々にして見られますが、山下さんがNPO法人を立ちあげて活動されるにあたっては、そのような反発のようなものはあったのでしょうか。

「新しいことを始めることに対して、変化を嫌う傾向はどの組織にもあると思うのです。新しいことには、多少どうやって対処していいか判らない部分がありますから、批判がいきやすいのです。そこで批判を恐れれば、新しいことはやらないほうがいいということになります」

だけど私は、『柔道界、あるいはスポーツ界がよくなることをやろうということ』で始めるんだ。新しいことを起こす時に批判がくるのは当たり前で、そんなことを気にしてはいけないし、その批判が的を射ていれば、なるほどと受け入れて、改めればいいだけだ」とシンブルに考えています。

それから、先輩方に訴えるだけでなく、同世代、あるいは次世代の若い人たちに発信することも始めました。

一歩一歩、歩みは遅くても前に進んで行く。一歩進むと二歩目は進みやすい。二歩進むと三歩目はもっと進みやすい。それを自分だけで進むのではなくて、同じ熱い思いを持った柔道を愛する人たちと一緒に手をつないでいくと、それがだんだんだんだん広がって、ある時、共鳴する人が一気に増えてきました。細々とでもそういう活動をしていくことに意味がありますし、活動そのものが外国ですごく喜ばれています。さらにそれを通して私の大好きな日本というものを、少しでも正しく認識してもらいたいと思って続けているのです。

私は、自分が本当の柔道家かどうかということは、これからの私の人生が決めると思っています。選手としてはできる限りのことはやってきました。だけど最初にお話ししましたように、柔道で大事なことはそ



山下さんは「色紙に書くのはいくつになっても『挑戦』です」と笑顔で教えてくれた

れを日常生活や人生で生かせるかどうかです。柔道では試練にぶつかっても立ちあがっていったのに、人生ではそこでしょげて、誰かが助けてくれるのをずっと待っていたり、ふてくされてしまうようでは、私がやってきた柔道は本物ではないと思うわけです。

問題に直面した時の答えは、自分が一番汗をかいて生きてきた道場の中にあるんじゃないかなと思って、情熱をもって向かっていくことが、今、一番大事にしていることです

初めてお目にかかった山下さんは、さすがは「世界の山下」と呼ばれた人だと自然と納得がいくような、大変なオーラを感じさせる人だった。けれど威圧的なところは少しもなく、非常に物腰柔らかく、丁寧な話を聞かせてくれた。

今回、仮にお互いに柔道着を着て、襟に手を掛け合つたとすれば、その組んだ瞬間に山下さんは、「あ、岩本というのはいくつという男だな」と感じ取ってくれただろう。そう思えるほどの洞察力をお持ちで、しかも、さらに理解を深めながら共に前に進むとされる。そのような姿勢を軸にして、現状を否定することも肯定することもなく、ただ「現実はいくつなんだ」と捉えて、それをよい方向に進めるにはどうすべきかを考え、行動に移していける。だから山下さんの言動は理解され、また支持されるのだと思った。

正直に生きること、そして日本の文化を大切に思い、世界に伝えていきたいと語られる姿が心に焼きついた。特にお話を聞か

せていただく中で「情熱」という言葉が出た時、とても嬉しく思った。志を実現するためには情熱が不可欠だと僕も考えているからだ。加えて、世界平和のためにというところまで視野を広げてアスリートが活動できることを教えていただき、僕自身、これからの人生に対する勇氣と自信をいただいた。

また、NPO法人として活動をされている柔道教育ソリダリティーについて熱烈に語られる姿が印象的だった。あれだけの実績がある人なら、周りがお膳立てしたものに名前を連ねるという行き方もあると思う。ところが山下さんは、逆風もあるだろう中で自ら手を挙げて、ご自身の言葉と行動力で賛同者を増やしておられる。その姿勢に、僕はものすごく感動した。

何を、なぜ、どう考えているのかを知ってほしいからと、いろいろなことを率直に包み隠さず話してくださいったのだが、そこに山下さんの、柔道を必ず人生の「道」につなげたいという強い意志を感じた。そして、その山下さんが情熱を注いでおられる柔道教育ソリダリティーの活動は、自他共栄の精神と共に将来的には全日本柔道連盟、そして国際柔道連盟の活動へと広がっていくのではないかと、そうあってほしいと思った。